

恩来の死と世界

毛沢東路線の忠実な実践者として振る舞いながら、おそらくその最大の批判者でもあったのが周恩来だろう。一部から「老奸巨猾」と攻撃されたこの天才的な政治の演出家がいなければ、今日の新中国が存在していたかどうか。彼が築きあげてきた大きな政治的遺産は、鄧小平を筆頭とする後継者に受け継がれようが、それにしても、当面、中国内外政策の機動性と柔軟性は失われそうだ。

□ 出席者 □

中国研究家
大久保 泰

サンケイ論説委員
柴田 穂

中国研究家
鳥居 民

東京外大助教授
〈司会〉中嶋 嶺雄
(五〇音順・敬称略)

毛路線の実践者で最大の批判者

中嶋 きょうのテーマは、周

以後の中国と世界ということですが、まず、中国にとって周恩来はいつい何であったかを、主として毛沢東との関連で論じていただきたい。

周恩来なかりせば

大久保 中国共産党五年の歴史を展望してみても、周恩来の足跡が非常に大きかったことは

いうまでもない。

毛沢東と周恩来はきわめて対照的な人物で、毛は路線を敷く人だとすれば、周はその路線に乗って巧みに政治・行政手腕を発揮した人だと思う。

毛路線をそのまま突っ走れば

おそらく中国革命は挫折していただろう。挫折を食い止めてうまく導いていったのが周恩来だ。彼は、中国共産党が重大な

岐路に立った時、常にキャストエイング・ポートを握りつつここまで引っぱってきた。

柴田 新中国における周の役割に限定していうと、一つは、毛沢東が革命家であり思想家であるということ、どちらかといえは毛は中国民衆を代表した内側へ向けての顔であった。これに対して周は、世界に向けた中国の顔だった。

第二は、大久保さんがいわれたように、毛が路線の設定者、いわば創造者であったのに対して、周はそれの実践者であった

という評価ができよう。まさに文革までの周の立場、位置はそうであった。

しかし私は第三に、文革以後の周は、毛の単なる忠実な行政官の領域をはみ出したと思う。いわば路線の設定者の分野に踏み込んだのではない。

私は、それを周恩来の時代と規定した。つまり、毛沢東がしだいに老齢化し、政策路線の決定、あるいは政策への介入度は相対的に後退していった。また彼を支持している文革派の力もそう絶対的なものでなくなっ

政治の芸術家・周



1973年8月、中国共産党十大会の席上の王洪文、毛沢東、周恩来（CNS）

た。しかも文革で党の組織が破壊されたという状況で、周の政治的役割が強まり、独自の政治的役割を果たすようになった。私は、六九年後半の外交政策の展開から、一年前に周が主催した全国人民代表大会（六二派ミニ解説参照）にいたる五、六年がその時期に当たると思う。

「何が可能か」を追求

鳥居 毛は農村の人であるのに対し、周は都市の人だったと思う。

毛は、都市が好きでなく、これに猜疑心と敵愾心を持っていた。このため、中共が都市を征服してから、毛・周の意見が食い違い始め、毛のやることと、周のついて行くやり方がぎくしゃくした。しかし結局のところ毛のやったことを周が修正したとみる。

周は、中国内戦の末期に、アメリカとソ連の間でちょうどにバランスをとって中国の近代化を図ろうとした。ところが毛は、向ソ一辺倒を宣言し、アメリカを恐るシンボルに仕立てあげた。そのねらいは都市の浄化

にあった。

周は都市の問題はゆっくりやればよいと考えた。そして、七〇年代にはいつての対米関係の改善にみるように、曲折はあったが、結局は周の路線が実現したと思う。

農業の集団化についても同じようなことがいえる。毛は農業の近代化をせせり、大躍進・人民公社路線を発動した。それに反対だった周は自己批判した。「不倒翁」の彼は、政策とともに自爆することのできない人だ。いつも政治権力の中心にいて、やがては自分の考えに従って修正していくというのがライフスタイルだった。

そして今日の中国の農村は、周が考えていたように基本的に五六年当時の生産隊を中心としたものに戻っている。

毛が、何が正しいかをいつも考えている人だとすれば、周は何が可能かを追求した。

中嶋 私なりに整理すると、毛沢東が中華民族、中国民族、あるいは革命の顔だとすれば、周恩来はいわば国家の顔、つまり国家的な使命感に立脚した政



なかじま・みねお
東京外国語大助教授、1936年、
松本生まれ。著書『現代中国論』
『中国像の検証』他。

治家だった。

大久保さんがいわれたように
岐路に立つて周が流れを変え、
政治的にそれを乗り切ったとい
うことの中には、悪い言葉でい
えば保身という側面があったの
だろうが、それ以上に、いま自
分がここで毛さんをささえて、
こちらに乗り移らなければ、中
国革命なり、中華人民共和国そ
のものがあぶないという使命感
があったと思う。

もう一つ、周は偉大な政治指
導者であったにもかかわらず、
意外に思想とかイデオロギー
面、つまりいわば非常に本質的
なところにコミット（関与）し
たことはなかった点も見がせ
ない。

というのは、私も文革以後と

くに六九年あたりから周恩来の
時代が来たと考えるが、それ以
前は、周は中国政治の中で非常
に大きな調停者でありながら、
政治の核心的なところではいつ
も是々非々の態度に終始した。
彼は、演説はするが論文は書か
なかった。

周恩来時代の背景

柴田 六九年後半から昨年の
人民代表大会までの周の役割の
増大を、現実の状況から切り離
じて考えるのはまちがいだらう。

つまり、周があれば前面上
出てきた客観的な背景があつ
て、まさにその上に乗ったから
こそ彼の強みが発揮された。

そうした背景の第一は、毛の

革命的ロマンティズムが現実
とあわなくなつたこと。第二
は、文革が党組織を破壊してし
まったために、相対的に行政府
や軍部の力が強まったこと。第
三に、中国の民衆が脱政治化、
脱イデオロギー化し、革命だど
か階級闘争について行けなくな
っていることだ。

大久保 その点、結局大きな
軌道として毛沢東思想という
ものが厳然としてあつて、しか
も毛がこれを左右していたとい
えるのではないか。その軌道の
上に乗って周恩来がうまいぐあ
いに行政能力を発揮したと私は
とりた。

柴田 そこが分かれるところ
だ。つまり客観的な状況は、毛
路線としたいに乖離していくの
だが、しかし彼のイデオロギー
や原則を公式的には否定しない
で、実際の政策を転換していく、
というやり方をとってきた。

その乖離の解消は、毛以後の
課題であつて、それまでは、毛
路線を否定しないとイワクの中
で政策の転換が行なわれた。
だからそこに、周の独自の役割
があつたと思う。

全身これアンテナ

中嶋 これまでは、周恩来の
功績の側面を論じてもらつたん
ですが、彼が大きな存在であつ
ただけに、他方で隠された側面
もあつたはずだ。

たとえば、かつて中国革命の
危機の時代に、上海のフランス
租界における共産党の公安関係
の責任者として、冷酷な粛正を
やつたという話もある。

大久保 許芥昱の周恩来論な
どでは、そのへんのところをつ
いているところがある。たしか
にそうした一面もなかつたとは
いえまい。

柴田 周は、たとえば外国人
の前で話すとき、マイクが曲が
つているとさつと直したり、レ
セプションの掃りぎわいちばん
最初に拍手が起こつたほうをば
つと見たりしたものだ。

このように全身アンテナのよ
うな人間というのは、必ずしも
毛沢東のような威風堂々たるも
のとは違って、小心翼翼、権謀
術数、保身といったイメージに
つながる。ただそれが、歴史の
転機において、むしろプラスに

転化したと思う。

また、彼だつて論文が書けな
かつたわけではないし、彼独自
の考え方があつたはずだが、そ
れを体系化して出さないはずさ
が当然つきまといつた。

さらに、文革で彼が毛を支持
し、劉少奇を見捨てたのは、毛
の文革路線が正しいと評価して
乗り移つたのではないと思ふ。
そこに彼の陰の部分があるのだ
が、それによつて收拾者、調停
者としての役割を発揮しえたとい
うプラスにつながっている。

もう一つ、周は、毛路線の忠
実な実践者として振る舞つてい
て同時にその実質的な批判者で
あつた。だから、毛路線の原則
を正面切つて否定せず、非常に
巧みに毛を自分の軌道に引きず
り込んでいって政策転換をやつ
た。その裏には、ほんとうに白
を黒と言いくるめるようなずる
さもあつたに違いない。

たとえば、ニクソン訪中を受
け入れる時、「重慶交渉につい
て」という論文の学習が行なわ
れた。第二次国共合作のための
いわゆる重慶交渉の中心にいた
のは周だし、そういううまい筋

を考えたのは彼だと思ふ。そういう意味で、彼は天才的な政治家

継承される周恩來の政治的遺産

人代報告は政治的遺言

中嶋 私は、ここ一年ぐらいの、批林批孔運動から水滸伝批判にいたる状況は、周恩来にあって非常にきびしいものがあつたと思ふ。この点は柴田さんとは意見の違ふところですが。

柴田 死の直前に、周が政治的に非常にまずい立場にあつたとすれば、人民日報は彼の死去に関してあのような破格の扱いをしなかつたはずだ。

彼のガンは七二年に発現しているわけだが、七三年八月の第一〇回党大会は、毛や文革派との力関係で周を中心とする穏健派の立場が決定的に強まったとはいえない状況のもとで、文革派の王洪文がN〇3に引き上げられるなど、周としては妥協を余儀なくされた。しかしこの種の妥協は中国的であり同時に周恩來的なものであつて、だからと

の演出家あるいは芸術家であつたと思ふ。

いつて彼の地位が不安定だつたとはいえないと思ふ。

また、彼としては、ほんとうにかけたのは、党大会よりは七五年一月の全国人民代表大会であつた。これこそ、彼の死後も考へて、体制と政策を設定した舞台ではなかつたか。

鳥居 私も、昨年の全人代での周報告は、彼の政治的遺言だと思ふ。彼が報告の最後の部分で、「今世紀末までに農工業、科学技術の近代化を実現し、国民経済を世界の前列に立たせ

る」という、いつてみれば富国強兵路線は、おそらく一九六二年以来毛の機嫌をとりながら、彼の路線に修正に修正を加えつつ、一貫して追求してきたものといえよう。

柴田 したがつて、七四年五月の入院から死ぬまで、とりわけ七五年一月からの一年間は、周恩來の時代といえないかもしれない。すでに鄧小平や李先念が、周恩來の職務をほとんど分担していた。だから、この一年は、いわゆるように周恩來は、政治的リーダーシップの圏外に去つていたかもしれない。

しかし、だからといつて彼が政治的にタナ上げされたとはいえない。つまり、まさに周の設定した体制と路線の中で鄧が出

てきて、その後の政策を継承している。

だからこそ、この一年間の中国の内外政策に、そう大きな揺れがなかつた。また、批林批孔や水滸伝批判、それに最近の教育革命キャンペーンと急進派の攻撃の矢が次々と放たれたけれども、その政治的意図が達成されないことがこの一年で非常につきりした。

これは、鄧が周にとつて代わるために、毛や文革派から推されたものでないことを証明するものではないか。これはいわば周の残した遺産であつて、今後この遺産の大きいことがしだいに明るみに出てくるのではないかと思ふ。

三つの政治グループ

中嶋 昨年一月から一二月にかけて起こつた教育革命キャンペーンでは、周恩來路線につながると思へられる周教育相らが批判されて一応決着がついた形ですが、今の柴田説との関連はどうでしょうか。

柴田 つまり、文革の正当性、現代修正主義批判という政治原

則は誰も批判できないが、實質的に、これを要質しようという力が非常に大きい。教育面でも、中国の工業化、生産優先の要請にこたえるために、ほんとうは文革による教育革命を改め、正常化しなければならぬところに来てゐる。

一方、毛や文革派にとっては教育、芸術など文化部門は、彼らが存在意義ないしは政治的生命をかけた分野だ。だからこの領域をいわば聖域として守るわけだ。

しかし同時に、周教育相を批判したものの、彼を追い落とすことができないところに文革派の限界が露呈されている。

大久保 そうした理想と現実の食い違いは、今後も中国の政治の中に絶えず起つてくると思ふ。

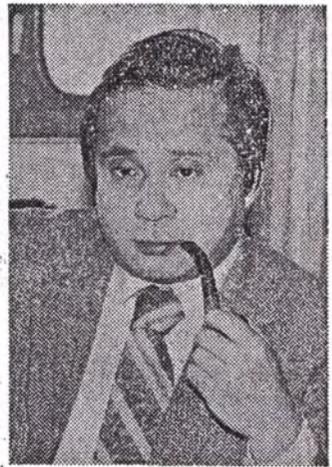
中嶋 私は、六九年からニクソン訪中、日中国交正常化を経て、七三年夏の党十全大会が周恩來時代のピークだつたと思ふ。その後周はむしろ守勢に立たされた。

それはともかくとして、ここで鄧小平をクローズアップせざ



おおきほ・やすし

中国研究家。1915年、福岡生まれ。著書『中国共産党史』『中共30年』他。



しばた・みのる
サンケイ新聞外信部次長兼論説委員。1930年生。著書『周恩来の時代』『現代中国人物100選』他。

るをえない。柴田説だと、鄧は周の後継者として、周路線に乗って復活し、現在の地位を占めているということですが、私はいまの中国の政治構造を、①文革・急進派、②実務・穏健派、に加えるに③鄧に代表される旧実権派の三つに分けたほうがわかりやすいように思う。

というのは、おっしゃる通りに鄧は脱文革の潮流に乗って復活した。しかし、出てきた時に王海容が付き添っていたことに片りんが現われているように毛との関係もけっして悪くない。しかし文革であれだけ毛に罵倒されたことくらいは、鄧と毛との間に全面的な信頼関係があるとは思えない。同様に、鄧は、内心では周をも信頼してい

なかったはずだ。

そうだとすると、鄧は脱文革の潮流に乗って復権したが、ひとたび復権すると周にも是非非、毛にも一定の距離をおくという形で、いわば第三の道を歩みつつ今日の地位を築いてきたのではないかと思う。

それは張春橋についてもいえる。張は鄧にくつついて実務官僚グループを形成している。

柴田 それはばくも認める。

というのは、林彪の失脚、ニクソン訪中、昨年の全人代、それに鄧の復活などの事件は、全部毛が積極的に認めたものではないと思う。その間に毛や文革派の妥協や譲歩があったはずだ。

そうした譲歩を迫ったものは周を中心とする行政幹部、鄧を

ちを含めた旧実権派、それに軍だと思ふ。この三つの連合勢力の力が強く、毛も自分の考えを貫けない。

だから、鄧を代表とする勢力は周をささえた勢力とは違う。その意味で、中嶋さんがいわれた第三の勢力という規定は正しいと思う。

とくに林彪失脚後の軍の主流派である第二野戦軍系の軍幹部が鄧を復活させ、さらにその地位を上昇させるのに大きな役割

を果たした。

大久保 たしかに、抗日戦争時代、鄧は第二野戦軍の政治委員をやっていたが、最近、軍の首脳部にその系統の人が多いことが、鄧をささえる基盤になっていると思う。

中嶋 鄧は、そういうわけで軍の中にも力がある。初めは代理か何かで出てきたような感じではないながら、あつという間に党軍、政を実にバランスよく握ってしまった。

内政重視に傾く鄧小平路線

ギスギスした面が出る

中嶋 それでは次に、周恩来が死んだあとに中国がどうなるかを考えてみたい。

私は毛沢東以後が、中国にとって重大な転換期になると思う。しかし、周恩来の死によって、ただちに中国の内外政策がドラスチックな変化をみせるとは考えられない。

もつとも、周恩来の内外政策には非常にキメ細かな配慮が

たをした。

したがって私も、これからは周恩来時代よりもギスギスした時代が来るのではないかとみています。ことに中ソ関係は対立が激化しそうだ。もつとも毛沢東が死ねば中ソ関係はまた大きく変化するだろうが。

対米路線も、文革派の反撃で、周恩来ほど思い切った手をとて打っていけないだろう。

鳥居 中ソ関係については、さきごろ中国は、抑留中のソ連のヘリコプター乗員三名を釈放した。ソ連外務省極東部長の話だと、まだソ連の国境警備隊員三名が捕えられているという。もしこの三名も釈放されるようなことがあると、中ソ関係変化の重大なシグナルとなる。しかし毛がいる限り対ソ関係は中国にとって大きな鬼門だろう。

毛以後動き出すのは、やはり対ソ関係の是正だろう。

鄧小平の力量

柴田 たしかに、後継者である鄧小平のパーソナリティが周恩来とはかなり違う。周恩来には敵すらも畏敬させる人間的魅

力があり、中国民衆の声望も非常に高かった。鄧小平では身体も小さく、その風貌も、八億の民を担う大政治家としては見劣りする。

鄧小平は、党の組織を握ったし、財政や経済計画、選挙や憲法、党規約改正も担当した有能な実務家ではある。しかし、いろいろな勢力のバランスをとりながらこれを適切に調停していく能力については周恩来と比肩できない。文化大革命でいったん失脚したということも大きな経歴上の痛手だ。

ただ、鄧小平には周恩来が敷いてくれた政治体制と政策路線という大きな遺産がある。軍幹部の強力な支持という周恩来になかった強みもある。

周恩来時代は毛沢東時代に比べればより集団指導の色あいを強めたが、鄧小平はこうした強みと弱点をもちながら、周時代よりもっと集団指導的性格を強めていこう。そのため、政策決定には時間がかかるし、ダイナミックな政策展開はなくなるのではないか。

鳥居 毛がフォード大統領に

示唆したと伝えられているように、鄧が首相の地位を継ぐのはほぼまちがいない。そして、鄧は軍を握っており、急進派は毛の権威をバックに持っているというところでバランスしている。

したがって、毛以後は、大なり小なり動乱が起こると思う。こういう話がある。さる外交筋が上海で映画をみた。画面に鄧小平が出た時、観客の間に失笑ともとれる笑い声が起こったというのだ。上海では、鄧をそのようにみているとすれば、鄧としては、急進派に対して何か手を打たねばならないだろう。

大久保 毛沢東夫人の江青が勢力を伸ばすと、鄧小平との間がうまくいかなくなり、中国の政治に混乱が起こりかねない。



とりい・たみ

中国研究家。1928年、東京生まれ。著書『毛沢東五つの戦争』『周恩来と毛沢東』。

中嶋 基本的には、中国を取り巻く客観的情勢には、周恩来路線がよりマッチしており、江青の出る場はますますなくなっていくと思う。

しかし、周恩来の死で生じた人事的な空白に江青がつけ込んで、口ばしを入れてくることは大いにありうる。すでに昨年初来そうした動きは出ている。

また、ソ連のグルムイコ外相が訪日し、周恩来が死んで日本の総理大臣が表敬に中国大使館を訪れているという重要な時期に、陳楚駐日大使は本国に帰ったままで戻っていない。同じようなことが各国で生じている。

これは、周恩来が一年ほど前から、政治の実務から身を引いたことによって生じた変化の一

つだと思う。さらに、一昨年の晩秋以来問題になっている朝樞問題をとってみると、これを担当しているのは、韓念龍外務次官―喬冠華外相―鄧小平副首相のラインだ。もしこれを周恩来―廖承志のラインが担当していればこれほどまでに日本を覇権問題だけで追い込むことはせずに、中ソ関係を柱に国際関係を、もつとダイナミックに考えて、日中友好条約を結んだらうと思う。

これは知日度の度合い以上に中国外交の今後の体質のようなものを反映していると思う。

富国強兵・殖産興業

柴田 周恩来の時代というのは、中国の国内的要請に沿うように、国際環境を転換させた時代だといえる。周恩来は、文革直後の中国を内側から変えていくことの困難を知ったがゆえに、対外的な環境を変えることによって、外から新しい風を国内に吹き込ませ、脱文革を進めたとと言える。

ところが鄧小平は周恩来に比べるとまさに外交面がウィーク

・ポイントだ。中ソ会談や国連へは出ていっているが、たいした外交的キャリアもない。

もう一つは、周恩来の打った外交的布石をいまそう大きく変える必要もないという面もある。したがって、外交的停滞と対照的に、鄧小平は国内政策、ことに経済政策に力を入れ、国内志向型の政策をとっていくだろう。

すでに昨年春に開かれた「大業に学ぶ農業会議」では、華国鋒や陳永貴などの文革派も演説をしたが、基本的には、工業化の基礎として農業基盤を変えていくんだ、という生産優先型の方針をはっきり出している。ここに鄧小平時代が象徴されていると思う。

中央における穏健派の行政幹部、鄧小平を中心とする旧実権派、そして老齢になったといえ宋徳とか劉伯承などの元老たち、さらにそれを支持する軍幹部たち……こういう大きな連合勢力が、中央だけでなく地方にも浸透しているとすれば、江青ら文革派の策動にも非常に大きな限界があるだろう。

世の中きびしいだからこそ、リースなら東京リースをご指名ください。

リース品目は……

事務用機器/産業工作機器/公害防止機器/
通信用機器/輸送用機器/精密機器/医療用
機器/商業設備/レジャー機器/自動車など

T-LEASE[®]
東京リース株式会社

本社：東京都港区新橋5-22-10(松岡田村町ビル内)
☎(03)437-3071(代)
大阪支店：大阪市東区平野町2-34-3(勤業ビル内)
☎(06)203-2841(代)
名古屋支店：名古屋市中村区米屋町2-67(大東海ビル内)
☎(052)565-0011(代)
横浜支店：横浜市西区北幸1-4-1(天理ビル内)
☎(045)319-5151(代)
福岡支店：福岡市博多区博多駅東2-5-28(三博ビル内)
☎(092)451-8550(代)
広島支店：広島市八丁堀16-11(日本生命広島第2ビル内)
☎(0822)27-2571(代)
仙台支店：仙台市一番町3-1-26(第一勧業仙台ビル内)
☎(0222)62-8761(代)
札幌支店：札幌市中央区北2条西3(敬島ビル内)
☎(011)221-5433(代)

だから、いろいろギスギスはしても、文革派の巻き返しで中国が大混乱に陥ることはないと思はる。

進む脱イデオロギー

大久保 今年の杭州事件は、なるほど物価は上がっていないが、賃金も十数年間上がらなかつたことに対する労働者の不満が爆発したものだ。これは文革派にとって手痛い打撃だった。

中嶋 私は昨年、八年ぶりに中国を訪れたが、以前に比べると物が非常に豊かに出回っている。つまり、金さえあれば買える状態になってきたが、給料は昔のままで少しもふえない。幹部たちだけが買っている。これでは不満が出るのが当然だ。

そこで、今後の中国は、周恩来が全人大大会で演説した、いわば富国強兵策が、基本路線にならざるをえない。

柴田 生産優先を進めていく中で政治思想、階級闘争はどうしてくれるんだという問題が常に出てくる。言い換えれば政治思想優先、自力更生路線と、物質的インセンティブを重視しなけ

きびしさ増す日本の国際環境

第三世界外交の挫折

中嶋 最後に、日本をはじめとする国際政局に、周恩来の死はどういう影響を与えていくかを考えてみたい。

ればならないという現実の要請との矛盾だ。これはまさに文革後の毛沢東の政治原則と、実際にとられている現実主義的な政策との乖離を意味する。周恩来時代に続いて鄧小平時代は、こうした原則と現実との矛盾をかかえたまま推移していくだろう。それを調整するのは、おそらく毛沢東以後の課題だ。

この路線は対外的にもいくつもの矛盾を生んでおり、ことに中国の第三世界外交は最近大きな岐路に立たされている。

たとえば、鄧小平は一昨年二月の国連資源総会で、アラブの石油闘争を支持し、中国は第三世界の側に立つと演説した。ところが、第三世界の中には、あんな金持ちのアラブの王様と共同歩調をとれるものかという声が上がっている。昨年一二月に開かれたキューバの党大会でも、カストロはアラブの石油戦略を激しく非難した。

また、アジアでも、たとえばあれほど中国が支援していたハノイとの関係が、サイゴン陥落以降、日中国交正常化を生み出した周路線の継承だろう。だが、

も、インドのガンジー政権の問題、南沙諸島の問題、新太平洋ドクトリンの問題等々、ことごとく、ハノイと北京は対立している。逆にいえばハノイは親ソ的態度をとっている。

中嶋 ハノイは現在、国内建設のためにソ連から大量の援助をうけねばならない立場にあるとはいえ、歴史的にみてハノイは中ソのどちらかに深く傾斜することを強く警戒しているのだ。それがあからさまにアンチ北京の態度をとっていることのも裏には何かありそうだ。たとえばかつて革命勝利後の中国に対し、スターリンが内政干渉まがいのことを言い、毛沢東を怒らせたように、今度は中国がベトナム戦勝後のハノイに、ソ連と

手を切れなどと言ったのではないかと思わせるほど、両国の関係は悪化している。

六〇年代に中国があれほど支援したキューバとの関係がひどく冷却し、いままたベトナムとの関係が悪化しているわけで、中国の第三世界外交は、非共産国外交のみならず、社会主義圏の中の低開発諸国との関係も、まづいかなくなってきた。

柴田 たとえば東南アジア諸国の政府と共存外交を進めていこうとすれば、東南アジアの革命勢力への支援をかつてと同じようにやっていくことはできない。また、西側との経済・技術交流を強めていけばいくほど、西側の景気変動の影響を受けるようになるし、中国の自力更生

路線とも矛盾してくる。だから、現在の中国の外交は、第三世界外交論や国内経済建設の自力更生路線との矛盾が生じている。

日本を巻き込む中ソ対立

中嶋 そうなればなるほど、中国としては対米、対日関係を重視せざるをえなくなる。アメリカはそこを見通して、フォードが訪中し、帰途、米日中の一種の太平洋連合をめざす新太平洋ドクトリンを打ち出した。中国はこれに対して沈黙を守っているが、実態的にはソ連の覇権に反対する中米日の反覇権連合ということでむしろこれに乗りかかっている。

これが逆に北朝鮮労働党の警

戒色を強めさせ、ハノイの強い反発を生み出している。

ところが、ではハノイはアメリカとの関係を重視していないかというところででもない。レ・ジュアン(ベトナム労働党第一書記)がモスクワに出かけていて、中国があれほど批判している全欧安保会議を支持しているように、米ソ・デタレトのラインに乗って、モスクワ経由で対米接近を図っているように思える。

日中関係は、このような複雑な環境の中に置かれているといえよう。

柴田 ハノイは、アメリカと戦っている時には中ソのバランスをとっていたが、戦争が終わってからはソ連と米日でバラ

スをとっていく方向に変わってきていると思う。

ところで、中ソ対立が中ソ国境の軍事的緊張である間は、日本はそう心配する必要はなかったが、今やアジアを舞台にしての外交戦となり、互いにアジアに相手の影響力が強まらないよう、それを阻止することに主要なエネルギーをさいている。

中国が日本に対して、日中平和友好条約に覇権条項を盛り込めと主張しているのも、日本をソ連から引き離し、中国に引き付けようとしているからだ。日本が、中ソのヘゲモニー争いの中で、等距離外交を守っていくことはますますむずかしくなっている。

大久保 全く同感で、したが

って、覇権条項でもめている日中友好条約の締結を当面、急がないことが肝要だ。

中嶋 日中共同声明に覇権条項を入れてしまったのは、米中共同声明にはいっていただけからだ。日本の外務省は、アメリカも入れたのだからいいだろうと安易に入れてしまった。

しかし、一方で米ソ・デタント外交、他方で米日中の連携とされるアメリカのような力は日本にはない。日本は対米追随外交をやめ、大きな角度からアジアにおける中ソ対立の動向を見きわめ、主体的・独自の条件のなかで外交を考えていかなければならないだろう。

本社 長時間どうもありがとうございました。

やらひねばならぬ今年こそ。

リースなら東京リースをご指名ください。

リース品目は……

事務用機器/産業工作機器/公署防犯機器/
通信用機器/輸送用機器/精密機器/医療用
機器/商業設備/レジャー機器/自動車など

T-LEASE
東京リース株式会社

本社：東京都港区新橋5-22-10(松岡町ビル内)
☎(03)437-3071(代)
大阪支店：大阪市東区平野町2-34-3(勸業ビル内)
☎(06)203-2841(代)
名古屋支店：名古屋市中村区米屋町2-67(栄東海ビル内)
☎(052)565-0011(代)
横浜支店：横浜市西区北幸1-4-1(天理ビル内)
☎(045)319-5151(代)
福岡支店：福岡市博多区博多駅東2-5-28(三博ビル内)
☎(092)451-8550(代)
広島支店：広島市八丁堀16-11(日本生命広島第2ビル内)
☎(0822)27-2571(代)
仙台支店：仙台市一番町3-1-26(第一勧業仙台ビル内)
☎(0222)62-8761(代)
札幌支店：札幌市中央区北2条西3(歌島ビル内)
☎(011)221-5433(代)